

優秀賞

赤ちゃんになっていくひいばあちゃん

土庄町立土庄小学校四年 天満 瑞希

ぼくの家には、百一さいのひいばあちゃんがあります。百一さいだと聞くとほとんどの人が、「すごいなあ。」とびっくりします。

そんなひいばあちゃんの口ぐせは、「えらい、えらい。」

何をして笑顔でほめてくれました。宿題をしている時やごはんを残さず食べた時、妹といっしょに遊んでいる時、当たり前のように遊んでいるのに、

「みずきはえらいなあ。」

とほめてくれました。お母さんが、「そんな事で『えらい』と言わんでいい。」と言うけれど、やっぱりほめられるとぼくはうれしい。そんないつもニコニコやさしいひいばあちゃんが本当に大好きでした。

ひいばあちゃんは、そうめんを作る仕事をしながら、まだ子どもだったぼくのお母さんの世話をいっぱいしてくれたそうです。

そして何十年かたって、今度はぼくが生まれた時は、「男の子が生まれた。」と、すぐくよるこんで、うれしそうにまた世話をしてくれました。

そんなひいばあちゃんは、昔から本当に元気で、自分の事は後回しにして、人の事ばかり心配して、とても気がきくやさしいせいにかくの人だったそうです。

いつもぼくたちの事を気にかけてくれて、「寒くないか。」とか、「暑くないか。」「おなかすいてないか。」「学校はどうか、楽しいか。」などなど、本当に

言い出したらきりが無いほど声をかけてくれました。それがあまりにも多いと、たまにぼくは「うるさいなあ。」と思ってしまう。

でも、そんな元気なひいばあちゃんも年をとる度にだんだんとできる事が少なくなっていくきました。

三年前からいつきに耳が遠くなり、物忘れもひどくなりました。

時間や曜日が分からなくなり、同じ事を何度も言ったり、聞いたりするようになりました。

好ききらいなく何でも、「おいしい。」と言って食べていたごはんもあまり食べられず、前より一回りも二回りも小さくなりました。せ中も足もぐいと丸まって、一人で立つ事さえもできなくなりました。

少し前までは自分でできた事が、今は何をするのもあぶなくて目がはなせません。

そうなるのにん知しようも進み、朝と夜関係なく大声でさけんんだり、人が

変わったようにこわい顔で急におこり出したりするようになりました。あんなにおだやかだったひいばあちゃんがだんだんこわれて別人になっていきました。

人の世話ばかり焼いてきた人が、今はだれかの助けがないと、かく実生きてはいけません。だけど、ぼくはひいばあちゃんに何もできなくて、もうしわけない気持ちになりました。それに、ひいばあちゃんに「元気？」と聞くけれど、ふだんの会話もはずみません。

あんなに、「えらい、えらい。」が口ぐせだったのに、今では、「ごめんな、世話をかけてごめん。」に変わってしまいました。

今はまだぼくの事を少し覚えているけれど、ボーっとする時間もふえてきたら、「だんだんと家族の事も忘れて、何も分からなくなるんだらうな。」と思うと、なんだかすごく悲しくなっています。

今年の夏休みこそは家族で遊びに行きたかったけれど、「高らしいのひいばあ

ちゃんにコロナをうつすわけにはいかない。」と、ぼくは出かける事もずつとずつとガマンしてきました。それなのにぼくを忘れていくなんて。ぼくは本当に「いやだなあ。」と思いました。

ぼくはお母さんに、「なんで年をとると、にん知しよになつたり、赤ちゃんみたいにワガママになつたりするんだらう。」

と、ちよつとイラツとしながら聞いたら、

「年をとつていつか死んでいく時、死のきようふをあまり感じないよう、和らげるためにそうなつていくと聞いたよ。」

と言われました。

だれもが好きでにん知しよになつているわけではありません。生きている者には必ず老いや死があり、いつかぼくにもそんな時がやつてきます。

「死」つて考えるとやっぱりこわい感じがするけれど、そのきようふを和らげるためと考えると仕方がないのかなと思ひました。

どんなすがたになつていこうと、ぼ

くの中には、やさしかったころのひいばあちゃんとの思い出がいっぱい残っています。

これからは、ぼくが今までの分の「ありがとう。」をいっぱいいっぱい言つてあげたいです。

コロナに負けずにまだまだ長生きしてよね。ひいばあちゃん。